
少女死にたがり症候群

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女死にたがり症候群

【Nコード】

N0652Z

【作者名】

夢来

【あらすじ】

何度でも死にたがった少女と、いつでもそれを助けた男。ついに少女は男を殺すことに成功した。——その殺害方法とは、

4月13日

昨日書いた通りだが、うちに転がり込んだ少女はちと厄介だ。掃除、洗濯、炊事……本当に何でもこなすが、すぐに疲れて顔色が悪くなる。そんな状態になってまで「あなたのために何かしたい」ときたもんだ。

——俺も俺で、なぜ追い出さねエ？

4月26日

あいつは人のことばかり聞きたがるくせに、自分のことは一切話さねエ。連絡先も、今どこに住んでんのかも、何一つ。追い出すに追い出せねエじゃねエか……。

しかし相変わらずよく働く。今日のだし巻き卵はやけに旨かった。

4月28日

今日は一日、あいつの様子がおかしかった。俺はただ、いつも疑問に思ってたことを口にしたただけだ。

「なぜ俺なんだ。お前みたいに若い女、他の男がほっとかねエだろ？　こんな結婚適齢期も過ぎたバツイチ相手にしてんな」

……というような内容だ。どうやら気にさわったらしい。失言だったか。

5月7日

——ずっと変だったんだ。

口数は少ねエし、にこりとも笑わねエ。それでいてあいつは、家事だけはいつも以上にてきぱきとこなした。

「こよりにした綿菓子で首を締めたら、雲にまで届きそうな気がする」

……あいつがぼつりと呟いた一言に、背筋がぞつとした。

5月8日

ありえねエ！

仕事の合間に部屋に戻ったら、あいつが首を吊って死にかけてた！無理やりひっぺがして床に倒れ込んだら、あいつはゴホゴホと咳をしながら言った。

「ミルクティーの海に身を投げて、肺いっぱい甘い香りで満たされたい」

……まさか、とは思うが――、明日は要注意だ。

5月9日

今日一日気を張っていたが、あいつは何もしなかった。よかった。……だが、あいつはまだおかしいままだ。

6月27日

そろそろ夏が始まる。

何かに誘われるみてエに、セミが地面から這い出してくるかのように、あいつは事を起こした。

水を張った浴槽で、シャワーを出しっぱなしにしながら、大量の水を飲んで沈んでいた。

慌てて引き上げて、タオルにくるんで、水を強引に吐き出させた。ぼんやりと取り戻した意識で、あいつはこんな言葉を絞り出した。

「……飴細工のカッターで手首を切ったら、ワインロゼの雫が溢れ出すかしら」

死にたがり症候群の少女は、そのまま再び意識を失った。今はまだ寝ている。

7月1日

あいつはあれから、何とか回復した。

しかし依然として笑わない。

何がそんなにお前を変えさせた？

俺の言葉がか？ 態度か？

……原因が俺にあるであろうことくらい分かってんだ。でも、何でも話してくれなきゃ伝わらねェんだよ……！

男の日記は、とりあえずここまでだ。

7月2日、ここはとある小さな診療所。そこに隣接した離れのよ
うな生活空間には、今、二人の人間がいた。

一人はこの家の主である、診療所の医師。もう一人は、最近二十
歳を迎えたばかりのような、まだあどけなさを残す少女だ。

少女は手に包丁を持っていた。周囲の床や壁には赤い液体が点々と
付着し、医師の男は血だらけだった。

「あ……ああ………」

大きな黒い瞳を更に大きく見開いて、少女は肩をわななかす。

初夏の暑さでじわりと汗ばむ寝室のフローリングに、彼女の汗と、
それから男の鮮血が一粒、ぱたりと落ちた。

「先生……」

男を呼ぶ少女の声は、頼りなく震えている。

男は、ゆっくりと右腕を動かした。その手の中には、出刃包丁の
刃。切っ先は少女の腹に向き、その柄は少女が固く握り締めていた。

バチン！！

しん、と静まり返る室内に、突如として、皮膚を打つ乾いた音が響いた。

「馬鹿野郎！」

続いて、男の怒声が空を裂く。

……カラン。

その後、彼は少女の手から抜き取った包丁を、床の上を滑らせて遠くへ放った。

——男にひっぱたかれた右頬が、じわりと熱を持ち始めた時、

「うっ……ご、ごめんなさいいゝ！」

少女はぼろぼろと涙を溢しながら、男にすがった。

男は傷だらけの腕を回して、それに答えてやる。

「自分を傷付けるようなこと、すんじゃねェよ……」

「はい……ごめんなさいっ……！ うっ……」

少女は泣いた。ひぐひぐと喘ぎながら、顔中を涙と鼻水でぐちゃぐちゃにしながら、まるで数年間溜め込んだ涙を一気に吐き出すように、大声を上げて泣いた。

「先生！ 先生につ、あ……会えなくて、さっ、寂しくて！ 苦しく、て！ 会いにつ……来た、のにつ……もっと、もっと、苦しく

て……！」

「……あア」

「先生につ、なんで俺なんだって、言われたとき……わたし、こん
つ……こんなに、好きなのにつ、て、……ううう」

「あア、あア……。悪かった。いつまでもガキ扱いしてなア……」

「だからっ、わたし……し、死のうとしたらっ、また、先生がっ……
…助けて、くれるって………！」

「そうか……。確かに、な……」

「先生っ、わたし……先生のことが好きだよ！ 何でもするから
！ ……も、迷惑かけないからっ！」

「あア……」

自身の希望を、願いを、訴えを、懇願を、ただただ真摯に受け止
める男に向かって、

「先生……っ、わたしのこと、好きになってよう………！」

少女は必死に心の内を告白した。

「………そうだな」

男はしばらく思考を巡らせた後、深く、長く、息を吐き——……、

少女に、その唇で答えを返した。

こうして、死にたがり症候群疾患者は、その病を治してくれた、愛する年上の医者殺すことに成功した。

——殺害方法、『悩殺』。

4月12日

今日、俺が昔診ていた少女が、この診療所にやって来た。

当時5歳だったか7歳だったか……、とにかくまだチビだったあいつは、随分綺麗になっていた。二十歳くらいに見える女は、黒い髪を長く伸ばし、薄い化粧をして、飾らない、それでいて女らしい服装でそこに佇み、ふわりと笑っていた。

病気がちだった彼女を、俺が診察して数年。確か養生のために引っ越したと記憶しているが、どうやらだいぶ丈夫になったから戻ってきたらしい。

その話の真偽は定かではないが、そいつはここに泊めて欲しいと言った。

「先生のが好きです。掃除でも料理でも何でもします。だから、ここに泊めさせて下さい」

……だ、そうだ。

夏に出会い、夏に別れたその女は、あまりにも昔のまま過ぎた。
あどけなく、一切の汚れを知らんとばかりに清らかな少女に、不覚
にも鼓動が早くなる。

いい歳して何してやがる。

——さて、困ったことになったもんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0652z/>

少女死にたがり症候群

2011年12月2日16時51分発行